オンライン講座　日本史をにぎわせた女性たち　Ⅱ

テーマ　　：「戦国一の聖女　細川ガラシャ」
日　時　　：2023 年　1月　10 日
講　師　　：林　和清　先生
当日参加受講生：21 名（在籍 30 名）　再視聴あり

まず、12月の「日野富子」についての今日のひとことを紹介いただき、質問にお答え頂きました。先生のご意見では、富子は自分の地位を利用して富を得ることに執着し、心情をくみ取る何物もない・・といった女性だったようです。
今回はうって変わって「戦国一の聖女　細川ガラシャ」の話を伺いました。

細川　忠興に嫁ぐ

1563年：明智　珠（本名）は明智光秀と妻・煕子の間に三女として生まれる。15歳のときに主君織田信長の勧めにより細川藤孝の嫡男・忠興に嫁ぎ、京都盆地の西南部にある勝龍寺城（右写真、忠興と珠の像）で新婚時代を過ごしたと言われます。

本能寺の変

1582年：織田信長家臣の主だった面々が京を離れたことを好機と捉え、父・明智光秀が僅かな人数で本能寺に宿泊するという信長を襲撃します。奇襲は成功したものの、京畿における諸大名の集結には失敗。珠の嫁ぎ先細川家に「忠興を引き立てたい思いがあり、平定後は天下を譲る」と味方になることを乞いますが、支持は得られず、光秀は山崎の戦いに敗れ、追い詰められて土民に討たれます。
光秀の娘である珠ではありますが、忠興の愛は深く離縁せずに辺境の地・味土野（京丹後市）に幽閉します。
この時、珠は父や家族を見殺しにした忠興を許せず孤独感に苛まれていたのかもしれません。

キリシタンへの道

1584年：豊臣秀吉の取りなしもあり、忠興は珠を大坂屋敷に戻します。独占欲の強い忠興は16年間も珠の外出を禁じます。珠は禅宗の僧侶の話を聞き、瞑想を行い学びを深めていきますが、深い憂慮に閉ざされた状態から抜け出すことは容易ではなかったようです。その後夫・忠興から高山右近の語ったキリシタンの教義を伝え聞くうちに、関心が深まります。侍女清原マリアも熱心に聖書を勧め、珠は次第にキリスト教のヒューマニズム的思想にひかれ始め、1587年忠興が秀吉の九州征伐に従軍している間に清原マリアから洗礼を受け「ガラシャ」となります。帰ってきた忠興は驚愕しますが、のちにはガラシャのために礼拝堂を建てます。

（大阪ｱﾃﾄﾞﾗﾙ聖ﾏﾘｱ大聖堂・正面がｶﾞﾗｼｬ像⇒
横には高山右近像が立っています）

崇禅寺のガラシャの墓

最期

1600年関ケ原の戦いで夫・忠興は東軍（家康）に入ることを表明し上杉討伐に出兵。西軍・石田光成はガラシャを人質に取ろうとしますが、ガラシャは武将の妻として、キリシタンとしてふさわしく死にたいと考え、留守を任されていた小笠原小斎に槍で胸を突かせて絶命します。38年の生涯でした。
ガラシャが大変美しく聡明であったことは、ポルトガル人宣教師ルイス・フロイスの書簡やクラセの著作にも記されています。また、ガラシャの信仰心の深さはオペラの題材となり、ハプスブルグ家でも上演されたとのことです。　　（担当　　口村）